

子供の病氣

———游亭に———

芥川龍之介

青空文庫

夏目先生は書の幅を見ると、独り語のように「旭窓だね」と云った。落款はなるほど旭窓外史だった。自分は先生にこう云った。「旭窓は淡窓の孫でしょう。淡窓の子は何と云いましたかしら？」先生は即座に「夢窓だろう」と答えた。

——すると急に目がさめた。蚊帳の中には次の間にもした電燈の光がさしこんでいた。妻は二つになる男の子のおむつを取り換えているらしかつた。子供は勿論泣きつづけていた。自分はそちらに背を向けながら、もう一度眠りにはいろうとした。すると妻がこう云った。「いやよ。多加ちゃん。また病氣になつちやあ」自分は妻に声をかけた。「どうかしたのか？」「ええ、お腹が少し悪いようなんです」この子供は長男に比べると、何か病氣をし勝ちだった。それだけに不安も感じれば、反対にまた馴れつこのように等閑にする気味もないではなかつた。「あした、Sさんに見て頂けよ」「ええ、今夜見て頂くと思つたんですけれども」自分は子供の泣きやんだ後、もとのようにぐつすり寝入ってしまった。

翌朝目をさました時にも、夢のことははつきり覚えていた。淡窓は広瀬淡窓の氣だった。しかし旭窓だの夢窓だのと云うのは全然架空の人物らしかつた。そう云えば

確か講釈師に南窓なんそうと云うのがあつたなどと思つた。しかし子供の病氣のことは余り心にもかからなかつた。それが多少氣になり出したのはSさんから歸つて来た妻の言葉を聞いた時だつた。「やつぱり消化不良ですつて。先生も後のちほどいらつしやいますつて」妻は子供を横抱きにしたまま、怒つたようにものを云つた。「熱は？」「七度六分ばかり、——ゆうべはちつともなかつたんですけれども」自分は二階の書齋へこもり、毎日の仕事にとりかかつた。仕事は不相變あいかわらずはか撓たふさどらなかつた。が、それは必ずしも子供の病氣のせいばかりではなかつた。その中うちに、庭木を鳴らしながら、蒸暑むしあつい雨が降り出した。自分は書きかけの小説を前に、何本も敷島しきしまへ火を移した。

Sさんは午前に一度、日の暮に一度診察しんさつに見えた。日の暮には多加志たかしの洗腸せんちようをした。多加志は洗腸されながら、まじまじ電燈の火を眺めていた。洗腸の液はしばらくすると、淡黒うすくろい粘液ねんえきをさらい出した。自分は病を見たように感じた。「どうでしょう？

先生」

「何、大したことはありません。ただ氷を絶やさずに十分頭を冷やして下さい。——ああ、それから余りおあやしにならんように」先生はそう云つて歸つて行つた。

自分は夜も仕事をつづけ、一時ごろやつと床とこへはいつた。その前に後架こうかから出て来ると、

誰かまつ暗な台所に、こつこつ音をさせているものがあつた。「誰?」「わたしだよ」返事をしたのは母の声だつた。「何をしているんです?」「氷を壊こわしているんだよ」自分は迂闊うかつを恥はじながら、「電燈をつければ好いいのに」と云つた。「大丈夫だよ。手探りでも」自分がかまわずに電燈をつけた。細帯一つになつた母は無器用ぶぎように金槌かなづちを使つていた。その姿は何だか家庭に見るには、余りにみすぼらしい氣のするものだつた。氷も水に洗われた角には、きらりと電燈の光を反射していた。

けれども翌朝の多加志の熱は九度よりも少し高いくらいだつた。Sさんはまた午前中に見え、ゆうべの洗腸を繰り返した。自分はその手伝いをしながら、きようは粘液ねんえきの少ないようにと思つた。しかし便器をぬいてみると、粘液はゆうべよりもずっと多かつた。それを見た妻は誰にともなしに、「あんなにあります」と声を挙げた。その声は年の七つも若い女学生になつたかと思うくらい、はしたない調子を帯びたものだつた。自分は思わずSさんの顔を見た。「疫痢えいきりではないでしょうか?」「いや、疫痢じゃありません。疫痢は乳離れちよばなをしない内には、——」Sさんは案外落ち着いていた。

自分はSさんの帰つた後のち、毎日の仕事にとりかかつた。それは「サンデー毎日」の特別号に載せる小説だつた。しかも原稿の締切しめきりはあしたの朝に迫つていた。自分は氣乗きのりのし

ないのを、無理にペンだけ動かしてつけた。けれども多加志の泣き声はとかく神経にさわ
り勝ちだった。のみならず多加志が泣きやんだと思うと、今度は二つ年上の比呂志ひろしも思い
切り、大声に泣き出したりした。

神経にさわめることはそればかりではなかった。午後には見知らない青年が一人、金の工く
面めんを頼みに来た。「僕は筋肉労働者ですが、C先生から先生に紹介状を貰もらいましたから」
青年は無骨ぶこつそうにこう云った。自分は現在ま蠶まぐち口に二三円しかなかったから、不用の書物
を二冊渡し、これを金に換かえ給えと云った。青年は書物を受け取ると、丹念たんねんに奥附おくづけを
検しらべ出した。「この本は非売品と書いてありますね。非売品でも金になりますか？」自分
は情なさけない心もちになった。が、とにかく売れるはずだと答えた。「そうですね。じゃ失
敬けいします。」青年はただ疑わしうに、難ありがた有うとも何とも云わずに帰って行つた。

Sさんは日の暮にも洗腸をした。今度は粘液もずっと減へつていた。「ああ、今晚は少の
うございますね」手洗いの湯をすすめに来た母はほとんど手柄顔てがらがあにこう云った。自分も
安心をしなかつたにしろ、安心に近い寛くつろぎを感じた。それには粘液の多少のほかにも、多
加志の顔色や挙動などのふだんに変らないせいもあつたのだった。「あしたは多分熱さかが下
るでしょう。幸い吐はき気けも来ないようですから」Sさんは母に答えながら、満足そうに手

を洗っていた。

翌朝よくあさ自分の眼をさました時、伯母おばはもう次の間に自分の蚊帳かやを畳たたんでいた。それが蚊帳の環かんを鳴らしながら、「多加ちやんが」何とか云つたらしかった。まだ頭のぼんやりしていた自分は「多加志が？」と好いい加減に問い返した。「多加ちやんが悪いんだよ。入院させなければならぬんだよ」自分は床とこの上に起き直つた。きのうのきょうだけに意外な気がした。「Sさんは？」「先生ももう来ていらつしやるんだよ、さあさあ、早くお起きなさい」伯母は感情を隠すように、妙にかたくなな顔をしていた。自分はすぐに顔を洗あいに行つた。不あ相あ変あ雲あのかぶさつた、気色きしよくの悪い天気だった。風呂場ふろばの手桶ておけには山百やま合ゆりが二本、無造作むぞうさにただ抛ほうりこんであつた。何だかその匂においや褐色の花粉ひふがべたべた皮膚ひふにくつつきそうな気がした。

多加志はたつた一晚のうちに、すっかり眼くぼが窪くぼんでいた。今朝けさ妻が抱かき起おそうとすると、頭あたまを仰あ向けに垂たらしたまま、白い物を吐はいたとか云うことだった。欠伸あくびばかりしているのもいけないらしかった。自分は急にいじらしい気がした。同時にまた無気味ぶきみな心もちもした。Sさんは子供の枕もとに黙もく然ねんと敷しき島しまを啣くわえていた。それが自分の顔を見ると、「ちとお話したいことがありますから」と云つた。自分はSさんを二階に招まじ、火のない

火鉢をさし挟はさんで坐つた。「生命に危険はないと思いますが」Sさんはそう口を切つた。多加志はSさんの言葉によれば、すっかり腸胃を壊こわしていた。この上はただ二三日の間、あいだ断食だんじきをさせるほかに仕かたはなかつた。「それには入院おさせになった方が便利ではないかと思うんです」自分は多加志の容体ようたいはSさんの云っているよりも、ずっと危あやういのではないかと思つた。あるいはもう入院させても、手遅れなのではないかとも思つた。しかもとよりそんなことにこだわっているべき場合ではなかつた。自分は早速Sさん入院の運びを願うことにした。「じゃU病院にしましょう。近いだけでも便利ですから」Sさんはすすめられた茶も飲まずに、U病院へ電話をかけに行つた。自分はその間に妻を呼び、伯母にも病院へ行つて貰うことにした。

その日は客に会う日だつた。客は朝から四人ばかりあつた。自分は客と話しながら、入院の支度したくを急いでいる妻や伯母を意識していた。すると何か舌の先に、砂粒すなつぶに似たものを感じ出した。自分はこのごろ齶齒むしばにつめたセメントがとれたのではないかと思つた。けれども指先に出して見ると、ほんとうの齒の欠けたのだつた。自分は少し迷信的になつた。しかし客とは煙草たばこをのみのみ、売り物に出たとか噂のある抱ほう一いつの三味線の話などをして

そこへまた筋肉労働者と称する昨日きのうの青年も面会に来た。青年は玄関に立つたまま、昨日貰った二冊の本は一円二十銭にしかならなかつたから、もう四五円くれなしかと云う掛け合いをはじめた。のみならずいかに断つても、容易に帰るけしきを見せなかつた。自分はどうとう落着きを失い、「そんなことを聞いている時間はない。帰って貰おう」と怒鳴りつけた。青年はまだ不服そうに、「じゃ電車賃だけ下さい。五十銭貰えば好いんです」などと、さもしいことを並べていた。が、その手も利かないのを見ると、手荒に玄関の格子戸をしめ、やつと門外に退散した。自分はこの時こう云う寄附には今後断然応ずまいと思つた。

四人の客は五人になつた。五人目の客は年の若い仏蘭西文学の研究者だつた。自分はこの客と入れ違いに、茶の間の容子を窺いに行つた。するともう支度の出来た伯母は着肥つた子供を抱きながら、縁側をあちこち歩いてゐた。自分は色の悪い多加志の額へ、そつと唇を押しつけて見た。額はかなり火照つてゐた。しおむきもびくびく動いてゐた。「車は？」自分は小声にはかのことを云つた。「車？ 車はもう来ています」伯母はなぜか他人のように、叮嚀な言葉を使つてゐた。そこへ着物を更めた妻も羽根布団やバスケットを運んで来た。「では行つて参ります」妻は自分の前へ両手をつき、妙に真面目な声を出し

た。自分はただ多加志の帽子ぼうしを新しいやつに換えてやれと云った。それはつい四五日前まえ、自分の買って来た夏帽子だった。「もう新しいのに換えて置きました」妻はそう答えた後のち、箆筒たんすの上の鏡を覗のぞき、ちよいと襟もとを搔かき合せた。自分は彼等を見送らずに、もう一度二階へ引き返した。

自分は新たに来た客とジョルジュ・サンドの話などをしていた。その時庭木の若葉の間に二つの車の幌ほろが見えた。幌は垣の上にゆらめきながら、たちまち目の前を通り過ぎた。「一体十九世紀の前半の作家はバルザックにしろサンドにしろ、後半の作家よりは偉いですね」客は——自分のはつきり覚えている。客は熱心にこう云っていた。

午後にも客は絶えなかつた。自分はやつと日の暮に病院へ出かける時間を得た。曇天はいつか雨になつていた。自分は着物を着換えながら、女中に足駄あしだを出すようにと云った。そこへ大阪のN君が原稿を貰いに顔を出した。N君は泥まみれの長靴ながぐつをはき、外套がいとうに雨の痕あとを光らせていた。自分は玄関に出迎えたまま、これこれの事情のあつたために、何も書けなかつたと云う断りことわを述べた。N君は自分に同情した。「じゃ今度はあきらめます」とも云った。自分は何だかN君の同情を強しいたような心もちがした。同時に体ていの好い口実に瀕死ひんしの子供を使ったような気がした。

N君の帰ったか帰らないのに、伯母も病院から帰って来た。多加志は伯母の話によれば、その後ごも二度ばかり乳を吐いた。しかし幸い脳にだけは異状も来ずにいるらしかった。伯母はまだこのほかに看護婦は氣立ての善さそうなこと、今夜は病院へ妻の母が泊とまりに来てくれることなどを話した。「多加ちゃんがあすこへはいると直すぐに、日曜学校の生徒からだつて、花を一束ひとたば貰つたでしょう。さあ、お花だけにいやな氣がしてね」そんなことも話していた。自分はけさ話をしている内に、齒の欠けたことを思い出した。が、何とも云わなかつた。

家を出た時はまつ暗だつた。その中に細かい雨が降っていた。自分は門を出ると同時に、日ひ和より下げ駄たをはいているのに心づいた。しかもその日ひ和より下げ駄たは左の前まえ鼻ばな緒おがゆるんでいた。自分は何だかこの鼻緒が切れると、子供の命も終りそうな氣がした。しかしはき換えに帰るのはとうてい苛いら立たたしさに堪えなかつた。自分は足あし駄だを出さなかつた女中の愚ぐを怒いかりながら、うっかり下げ駄たを踏み返さないように、氣をつけ氣をつけ歩いて行つた。

病院へ着いたのは九時過ぎだつた。なるほど多加志の病室の外には姫ひめ百ひゃく合ごや撫なで子しこが五六本、洗面器の水に浸ひたされていた。病室の中の電燈の玉に風呂敷か何か懸かつていたから、顔も見えないほど薄暗かつた。そこに妻や妻の母は多加志を中に挟はさんだまま、帯を解かず

に横になつていた。多加志は妻の母の腕を枕に、すやすや寝入っているらしかった。妻は自分の来たのを知ると一人だけ布団ふとんの上に坐り、小声に「どうも御苦労さま」と云つた。妻の母もやはり同じことを云つた。それは予期していたよりも、気軽い調子を帯びたものだった。自分は幾分かほつとした気になり、彼等の枕もとに腰を下した。妻は乳を飲ませられぬために、多加志は泣くし、乳は張るし、二重に苦しい思いをすると云つた。「とてもゴムの乳つ首くらいじゃ駄目なんですもの。しまいには舌を吸わせましたわ」「今はわたしの乳を飲んでいるんですよ」妻の母は笑いながら、萎しなびた乳首ちくびを出して見せた。「一生懸命に吸うんでね、こんなになつてしまつた」自分もいつか笑つていた。「しかし存外好きそうですね。僕はもう今ごろは絶望かと思つた」「多加ちゃん？ 多加ちゃんは今もう大丈夫ですとも。なあに、ただのお腹なか下しなんですよ。あしたはきつと熱さかが下がりますよ」「御祖師おそしさま様の御利益ごりやくででしょう？」妻は母をひやかした。しかし法華ほけきょう經信者の母は妻の言葉も聞えないように、悪い熱をさますつもりか、一生懸命に口を尖とがらせ、ふうふう多加志の頭を吹いた。……………

×

×

×

多加^{たかし}志はやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小^{しょう}品^{ひん}にしたいたいと思つたことがある。けれどももうすっかりそう云うものを作ると、また病気がぶり返しそうな、迷信じみた心もちがした。そのためにとうとう書かずにしまった。今は多加志も庭木に吊^つつたハムモツクの中に眠っている。自分は原稿を頼まれたのを機会に、とりあえずこの話を書いて見ることにした。読者にはむしろ迷惑かも知れない。

(大正十二年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供の病気

———游亭に———

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>